

(討論要旨)

深谷氏の講演に続いて、質疑討論の時間が設けられた。はじめに西村慎太郎氏から、「東アジア法文明圏の中で、儒教政治文化は吉田神道や国学の形成に繋がっているのか」という質問があり、深谷氏は「例えば孟子に対して本居宣長や吉田松陰は批判的であり、独自の『日本性』を展開している。だが、『日本性』を鍛える際にも四書五経を媒介にしており、儒学が土台を提供している。国学は日本的なものと東アジア的なものが交錯している関係にあり、近世の一般教養として展開していた。そういう意味では『和学』と言うのが適切であると考えているが、その中で神話研究を追求したものが『国学』として展開していった。日本の教養、学問性を深める上でも、儒学は重要な役割を果たしていると考えている」と答えた。

続いて井上智勝氏から「日本が東アジアで唯一の元号制度保存国である根拠について、『一貫して活用してきたこと』を挙げているが、王朝を残しているのが日本のみであるという点も理由ではないか」と質問があり、これに対し深谷氏は「一世一元の制が原則であるなど、天皇制と補完する関係であると考えている。近代日本は『脱アジア』など、ヨーロッパに一番近いと主張してきた

が、その一方で元号については最も東アジア的な面を残している訳で、元号の機能は何なのかという議論は重要である」と述べた。また、井上氏は続けて「東アジア法文明圏の範囲」について尋ね、深谷氏は「南についてはベトナムも含めると考えているし、固定されたものではない。イベリア・インパクト以降、中国では清朝の時代において、東アジア世界は西へ北へ膨張した。日本でも江戸時代の征夷大將軍が、蝦夷地を東アジア法文明圏の範囲に組み込んだ」と答えた。これを受けて井上氏は「ベトナムでは王権と政権が別所された時期があったが、ベトナムを東アジア法文明圏に含めるとしている以上、王権と政権の別所に関して日本独自とは言えないのではないか」と尋ねた。これに深谷氏は「ベトナムについては不勉強であった。ここで私が言いたかった事は、他国でもナンバー2が政権を握る時期があったが、同じ場所であれば我々は、例えば『朝廷史』のような一つの形で捉える。そのため、別な場所にあるという点は重要視しなければならない、という意味である」と答えた。

高埜利彦氏は、元号に関する議論を受けて「元号使用の問題は現代天皇制を捉える上で重要な議論であると考えている。例えば公務員は元号使用について法の規制を受けており、マスコミは天皇制に関する集合心性を形成している。法の問題と集合心性という二点から天皇制を捉えていく必要がある」と述べた。深谷氏は「集合心性と言っても皆が同質のではなく、賛否両論あり、そ

の内の多数派によって守られていくものである。現代の『国民国家』においては不安定なものであり、全体を説明するのは難しい」と語った。

杉仁氏からは「明治維新は『東アジア化の極北』としているが、維新を経た近代日本が東アジアにおいて侵略性を発揮してしまつた事実があり、東アジア法文明圏の中でどう捉えるべきか。また、日本では山奥の村においても、国家文明の華が浸透したという認識がある。だが、中国においては国家は覇者が生み出すもの、文明は天子の徳によるものであるという認識であり、国家と文明は結びつかない。この点の読み違えが近代日本の侵略性に繋がるのではないか」との質問があり、深谷氏は「維新による『一王』化は全て上手くいった訳ではない。東京『遷都』の問題など、慣習によって規定されている面も多い。国家と文明については、まさに王権と政権の問題にも繋がってくる。近代日本の侵略については、東アジアの中心になるための中華との衝突と捉えることができる。東アジア法文明圏における日本という枠組みは近代、さらには現代においても本質的には変わっていないと考えている」と述べた。

さらに梅田千尋氏から「レジュメの最後に記された『読み替え・創り変えへ向かう飛翔力』に関しては時間の関係もあり、充分に説明されなかった。歴史的な背景から補足を戴きたい」との要望を受け、『安良城理論』に規定された歴史はイギリスの理論に基

づいているが、英語を日本語化するにあたっては距離感が生まれず、どうしてもバイアスがかかってしまう。『民本』や『太平』という言葉が東アジアの支配論理として存在していたのは間違いないが、『民本』は『デモクラシー』に置き換えられるものではなく、東アジアの中において鍛えられたものである。自前の言語によって歴史認識が出来る可能性があるのではないか、という意味である」と述べた。

続いて谷口眞子氏が、先の西村氏の質問を受けて「国学における『日本』の認識はもともと早く、十八世紀初頭まで遡れるのではないか。士大夫が支配している中国と、軍事情権に属したままで役人としての仕事を行う日本とは、違うものであるという認識が、武士の中でも発生していたのではないか。また、武家政権は京都の文化を積極的に取り入れていたけれども、支配の書としては儒学書を用いていることから、『東アジア化』として意識しているのは唐であり、武威を用いながらもそれを超えた政治支配力を自らがつけている点を認識している。だからこそ次の段階になった際に、自分たちが中心となって東アジア圏内を支配していくのだ、という意識に繋がっていくのではないかと語った。深谷氏は「武威に関してであるが、治者も含め近世の人間は三つの武功物語を教養として共有していた。それは、神功皇后の三韓征伐・元寇・壬辰戦争であるが、これは朝鮮半島の認識に大きな影響を与えている。また、武士の規範義務を形成しており、士民の中に武士を

規定していると言える。百姓の士分化願望が何故起こるかという点については、単に尊卑論から説明できるものではなく、それは身近にいるからであり、百姓が狙える位置にいる存在だからである」と述べた。

最後に高埜氏が「近世以来続いてきた漢学教育は、戦後になって否定された。我々は戦後教育を受け、西洋流の歴史学を学んでいるが、現在の歴史学は閉塞状態にあると感じている方も多いのではないか。東アジア法文明圏の視界から、西洋流の発想に囚われない新たなパラダイムを提示していけるのではないか」と述べ、討論を修了した。

(文責・長澤慎二)